雨唄の奏でるｓｔｏｒｙ

零暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨唄の奏でるｓｔｏｒｙ

【Ｎコード】

Ｎ５１５７Ｄ

【作者名】

零暁

【あらすじ】

１１月の良く晴れた土曜の昼下がりメリケンパークで出会った圭吾と水月、２人のＳＴＯＲＹが始まる

出会い（前書き）

以前から、この小説の構想がありましたが、なかなか形にする事が出来ませんでした。私の初小説です。読んで頂いて感想を頂けたら幸いです。

出会い

１１月半ばの土曜の昼下がり、パァァァーーーン　パ　パァァーーン　２ストロークの
甲高いエグゾーストが神戸の港町に響きわたる。
バイクは、メリケンパークの近くまでくると、スピードを落とし
メリケン波止場にバイクを
走らした。彼はバイクから降りヘルメットを取り、辺りを見渡し自
動販売機を探している。
自動販売機を見つけた彼は缶コーヒーを買いバイクに戻ろうと振
り向いたら、長い黒髪の女性が彼のバイクに跨っていた。彼は、潮
風になびく長い黒髪に一瞬見とれてしまった。
「いったいどれぐらいの時間が流れたのだろう」って思うぐらい長
い一瞬だった。
彼はふと、我に返り彼女の跨る彼のバイクの方へ歩みよった。「あ
の～俺のバイク・・・」彼が
話し終わるより早く「あっごめん、ごめんこのＮＳＲ絶版車やのに
めっちゃキレイに乗っとんな～。これ自分のバイク？」彼は自分の
愛車を褒められて悪い気はしなかった。　「うん、そうや
けど・・・」
「このＮＳＲ、９０？（キューマル）９１？（キューイチ）チャン
パーをＪＨＡに替えとうから排気の抜け、え～んとちゃうん？」彼
女はかなりバイクに詳しく彼が知らない単語を連発し圧倒されてい
ると、「ちょっと、聞いとん？」彼女からツッこみが入った。
「うん、聞いとうけど、んな知らん単語捲くし立てられても、俺、
チンプン・カンプンで
わからへんわ、」「ふ～ん自分男やのに、あんまバイク詳し～ない
んやな。」彼は、ちょっと
ムッっとしたが引き続き彼女のペースのまま会話が進められた。彼

は、タバコに火をつけ一服
しようとしたが彼女の矢の様な質問が飛んでくる。「自分、名前は？」「何歳？」「どっから来たん？」「・・・・」「・・・・」色々聞かれたが彼は落ち着いて、彼女の一方的なマシンガントークを聞いていたが、彼がぶっきらぼうに口を開いた。「人に名前を聞く時は、自分から名のるのが礼儀やろ。」彼女は、ハッとした顔をして私「ごめんな～一方的にしゃべってもて・・・、藤崎水月、２８歳、ＯＬやってま～す。」「みずき？へ～え、え～名前やな。俺、神代圭吾、２６歳、松岡コーポレーションの営業マン。」水月は、意外そうな顔をして「ふ～ん、え～トコ勤めとうやん。２６歳やったら、私の方がお姉さんやな。じゃ私達結婚したら、姉さん女房やな。」（付き合ってもないのになんで結婚やねん！んで、今知りおうたばっかりでＨもしてないやん。）圭吾は困惑しながら心の中でツッこんだ。水月は、圭吾の顔を見てクスッと笑い
「冗談やん！圭吾、真に受けんといてよ～。あっ呼び捨てにしてもた。」水月はバツが悪そうに圭吾を見た。圭吾はやさしく笑って「別にかまへんよ、ツレも呼び捨てやし・・・その代わり俺も水月って呼んでえ～？」「あかん、私の事は、女王様ってお呼び！オーホッホッホッ」圭吾はあっ気にとられた顔をしていると、水月は顔を真っ赤にして「ボケとんやからツッこんで～よ。」安物の漫才の様で２人とも笑い出した。水月はおもむろに「私の事、水月って呼んでえ～で。私もそっちの方が気つかわんでえ～し。」その後２人はとりとめのない会話を３０分ほどのち、水月が「彼女はおるん？」と切り出した。たぶん男女問わず必ず質問のひとつだろう。圭吾は「んにゃおらへんよ。」「ふ～んどれぐらいおらへんの？」「２年ぐらいかな」「またなんで別れたん？」
「えらいまた根掘り葉掘り聞いてくんな～。ん～～っ一言で言うと俺の仕事が忙し～なってもて、任された仕事がおもしろ～なっても

て、元彼、ほったらかしで仕事に没頭しとったらいつの間にか携帯の番号変わっとって自然消滅ってカンジ・・・」水月は大きな目をクリクリさせて圭吾を見て「へ～ぇ、圭吾ってマメそうに見えるのにな～。んじゃイベントん時とか寂しんちゃうん？」
「ちょっとはね、でもこいつがおるから寂しないで！」と言って圭吾は誇らしげに親指でＮＳＲを指差した。水月はニヤニヤと笑いながら「ふ～ん、強がって！ホンマは寂しいんちゃうん？ＮＳＲとやったらＨ出来ひんやん、モテへん男ほど車やバイクが恋人って言いたがるしな！」その言葉に
圭吾はカチンときて、「じゃあ水月は彼氏おるん？」水月はどもりながら「おっおらへんよ～わっ悪い！」「水月も俺とかわらへんやんけ～」圭吾は口調を荒げた。しかし水月は勝ち誇った口調で「私は彼氏がおらへんのちごて、私と釣り合う男が見つからへんから彼氏作らへんだけやん。圭吾みたいにバイクが彼女って言わへんもん。」その言葉に圭吾はかなりムッときていた。水月のマシンガントークは止まらない「今日び、バイクが彼女って流行らへんし、圭吾は自分でカッコえ～と思とうかもしれんけど、逆にサムいし・・・」ドゥルンバラバラ・・・・圭吾はＮＳＲのエンジンに火を入れた。水月はしまったという顔をし「ごめん、言い過ぎた・・・」圭吾はおだやかな性格な為キレる事はなかったが、今回は少しキレ掛かっていた「俺、今日初めて会う女にそこまで言われる筋合いあらへんし、水月は男を作らへんのちごて、性格悪～て男が逃げてまうんちゃうん！」半分キレ掛かった口調で言った後、圭吾はヘルメットをかぶった。水月は圭吾の腕をつかんで「ごめん、そんなに怒らんといてよ～」水月は謝ったが圭吾は聞く耳を持たず
水月の手を振り払った「ねぇ来週の金曜お詫びにご飯食べに行こ、晩８時にここで待っとうから。」「勝手に決めんな、俺も忙しいからそんな一方的な約束しらんわ！」と捨てゼリフを残して圭吾は走り去っていった。水月は圭吾の後ろ姿を見ながら「あ～又やってもた。真也ん時と同じ様にしゃべっとったらあかんな～せやけどあの

子、雰囲気とか仕草なんか、真也そっくりやったな～来週の金曜来てくれるかな？もういっぺん会いたいな～」と言いながら水月はメリケンパークを後にした。圭吾はバイクを走らせながら（なんなんや、あの女は、めっちゃ綺麗やったけど性格めちゃくちゃ悪いやんけ～三ノ宮とか連れて歩くんやったら、え～けど、彼女にするんやったらちょっと考えるわ～けどHは一回してみたいの～あぁっ！携帯番号聞くん忘れとったぁ～まあええか

あの手の女に深入りするとロクな事あらへんしな！）などと思いながら神戸の街に消えて行った。あの日から数日が経ち金曜のある会社内、「おい、矢野！」「課長なんですか？」「喜べ、出張や明日の朝一東京の本社にいってくれ。この資料全部まとめてな！」そう言って電話帳ぐらいの厚みのある書類の山をデスクの上に出した。

「えぇっ！この資料今日中にまとめるんですか？」「・・・」「・・・」「・・・」課長と矢野がデスクを挟んで言い争っている。数分後矢野が同期の川崎と藤森の所にやって

来て残念そうな顔をして「すまん！今晩の合コン行かれへんわ。明日朝一出張や。んで今日中にこの資料作ってまわなあかんねん。悪い他のメンツ誘てくれ。」「マジで～！今からかいな～他って今からおらへんで」2人が困った顔をしていると、「神代、帰りました。」と言って圭吾が外回りから帰って来た。

圭吾を見て藤森が閃いた顔をして「なぁ川崎、神代は？」川崎はあからさまにイヤそうな顔をして「神代～？あいつカッコえ～から、あいつとコンパ行くとえ～トコもって行かれるからな～あんまり気が進まへんのやけど・・・」「せやけど、まだ神代に声かけてないんやろ？とりあえず神代に声かけてみようぜ。」川崎は渋々神代の所へ行き今夜のコンパの件を話し圭吾を誘った。圭吾は二つ返事でO．Kし今夜に行く事となった。

待ち合わせ場所に圭吾達3人が待っていると、女性達がやってきた。一通り挨拶も終わり、

居酒屋で食事をする事になった。居酒屋に着いた6人は、自己紹介

を始め、川崎が「んじゃ、俺からいきま～す。川崎尚之です。２６でこいつらもタメ年で会社の同期で、・・・・・・」色々自己アピールし、女性達
の気を引こうとした自己紹介を長々と行い次に藤森の自己紹介も終わり圭吾の順番が回って来た。「神代圭吾です。趣味はバイクで今日はとりあえず、みんなと一緒に楽しく飲めたら
え～かな？って思うので、よろしく。」圭吾の自己紹介が終わった後、圭吾の容姿・スタイル
に女性達は、くぎずけになり、
川崎と藤森の自己紹介など、もうどうでもよく女性達の自己紹介も圭吾の気を引くものとなった。女性群の先陣を斬って今回のコンパの幹事である紀子が自己紹介を始めた。「田中紀子です。歳は２５歳、３人の中では１番年上です。趣味はバイクのタンデムシートに乗ってツーリングで～す。」紀子の自己紹介は、明らかに圭吾を意識した物となっていた。紀子はスレンダーな美人タイプの女性で川崎が「あっ、こいつ、バイクの後には女乗せへんで！」やっかみ半分にツッこみを入れた。すると紀子から「う・る・さ・い」とツッこみ返され、たじろんでいるのをしり目に次に絢音が自己紹介を始めた。「木下絢音、２４歳です。趣味は、お料理で得意料理は、肉ジャガで私の手料理食べてくれる彼氏が欲しいで～す。」
絢音は、身長こそあまり高くないが胸が大きく自分でもそこをセールス・ポイントにしているらしく胸を強調する服装でチラチラと圭吾の方を見ながら自己紹介を終えた。そうすると川崎が藤森に耳打ちし「絢音ちゃん、俺のタイプ！おっぱいでかいしメッチャかわいいやんけ～」
「川崎、お前ホンマにおっぱい星人やな」と藤森は呆れた顔でつぶやいた。最後に久美子が自己紹介を始めた。お世辞にもカワイイとは言えず体型的には太り気味で２人の引き立て役の様にも思えたが「遠藤久美子、２４歳趣味は、男のガブり寄り・寄り切り・押し倒しです。以上！」圭吾達は一瞬目が点となり、その後圭吾はツボに

入ったらしく大爆笑してしまった。笑い過ぎている圭吾を見兼ねて川崎が圭吾を静した。それを見て久美子は川崎に矢印が出てしまい、コンパの間中、久美子のガブり寄りに合う羽目になった。
コンパも終盤に差し掛かった頃、紀子等3人はお手洗いに立ち、その隙に圭吾達
3人は作戦会議を始め、「川崎、お前久美子ちゃんにエラい好かれとったやんけ～川崎は、
久美子ちゃんに決定！おめでとう」と藤森がチャカして言うと「俺、いややで～あんなんお持ち帰りするぐらいやったら今日、そのまま帰るわ。処で神代と藤森は誰狙いなん？ちなみに俺は絢音ちゃん狙いね！」「俺は、田中さんやな」藤森もボ～っとしている様に見えて、しっかり狙いを定めていたらしく、ちゃかり自己主張していた。
「神代は誰狙いなん？お前ホンマ、
カッコえ～から結構高めの女でも狙えるもんな～。」「そうでもないで、俺は別に川崎が思っとうほどモテへんし、それに狙とう子も特におらへんしお前ら、がんばって口説けよ！」そう言って2人を励ました。そうこうしている内に紀子達
が帰って来た。しばらくしてコンパはおひらきになり、居酒屋を出ると外は雨が降っていた。
藤森は紀子を送って帰る事になり三ノ宮駅へ歩いていった。川崎は絢音を口説こうと圭吾と
久美子から少し離れた場所で絢音と話そうとしていた。川崎は背中越しに顔を真っ赤にしながら「あの～もし良かったらこの後、2人きりで飲みに行かへん？」そう言って振り向くとそこには絢音では無く久美子が立っていた。「え～！ホンマ！行こ行こ！」川崎は久美子に引きずられる様に半泣きになりながら神戸の街に消えていった。絢音は圭吾に声を掛け「神代さん
今度ご飯食べに連れて行ってください。」絢音のまっすぐな眼差しに圭吾は悪い気はしなかった。むしろ男なら逆に嬉しい事だろう。
「うん、え～よご飯食べに行こか！」「ホンマ！やった～メッチャ

嬉しい！約束やで～」（やくそく・ヤクソク・約束）圭吾の脳裏に
１週間前の　水月との一方的な約束がフラッシュバックの様に甦っ
て来た。（あいつ、待っとんかな？）「神代さん、じゃあ携帯の番
号教えてよ」絢音が嬉しそうに圭吾の
携帯番号を聞いてきた。「ん、あぁそうやな」圭吾はスーツの内ポ
ケットから携帯を取り出そうとしたその時（あぁそうや、あん時携
帯の番号聞かずやったな～）「神代さん？」絢音が
圭吾の顔をのぞきこんだ。「あぁ、ごめんごめん、え～と・・・」
圭吾は携帯の時計で今の時間を
見た。Ｐ・Ｍ１０：５７だった（水月、もうおらへんやろな～・・・
けどもし、この雨ん中俺が
来るん待っとったら・・・けどこの状況メッチャ、オイシいしな～・
・・・・・！けど、もし俺の事、
待っとったら！）「絢音ちゃん、悪い俺ちょっと急用、思い出した
から今度埋め合わせするわ」そう言うと圭吾はメリケンパークに走
りだした。
「あぁ、神代さ～ん携帯番号～、あ～あ行ってもた。急用ってなん
か仕事でも思い出したんかな？今度埋め合わせするって言うとった
から、おいしいモンおごってもらおかな。」
そう言って絢音は駅へ歩き出した。その頃圭吾はメリケンパークに
向かってフラワーロード
を全力疾走していた。だんだん雨足が強くなってくる中、水月の事
を思い出していた。
水月の風になびく長い黒髪・女やのにやたらバイクに詳し～て・
ムカつくぐらい生意気で・・・
（やっぱ行くんやめよ～かな・・・・）そうこうしているうちに、
メリケンパークに到着した。
周りを見渡すが水月らしい人影は見当たらない、だがよく見ると遠
くに人影が見えた。
近ずくと水月が傘もささず立っていた。水月が人の気配に気付いて

振り向くと圭吾が
息を切らしながら「こぉのアホ！勝手に約束しやがって気になって来てもたやんけ！」
「え！なんで」「ハァハァ、なんでやあるかい！水月が来いってゆ～たやんけ！ハァ～しんど
水月もビシャビシャやんけ～このままやったら風邪ひくわ。とりあえず、雨宿りしに行こ。」
圭吾はジャケットを傘代わりに水月と2人でかぶった。
その時、水月が泣きながら圭吾に寄りかかった。「えっ！ちょっと水月？」「ごめんちょっとだけ、このままでおらして。」水月の小さく震える肩を圭吾はやさしく抱きしめていた。
ずっと
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

冷たい雨（前書き）

再び出会った圭吾と水月、２人のプレリュードが始まる。

冷たい雨

ザァーーー強く降る雨が神戸の街を濡らす。２人はメリケンパークに隣接するホテルの一室にいた。
「それでは明日の朝、お持ちします。」「ご無理言ってすいません。お願いします。」圭吾と水月の着ていた服はずぶ濡れだった為、乾かしてもらう様にホテルに頼んでいた。ガチャ、「ふぅ～温かった。圭吾もお風呂入ってきたら？」
水月に薦められ圭吾も浴室に入った、バスタブにはお湯が張られ圭吾の冷え切った身体をやさしく温めてくれた。
「うぅ～生き返る～あん時はこのまま凍え死ぬんちゃうんか？って思たでホンマ！」
ふとバスタブを見ると　（！？こっこれはもしかして、水月のヘアー？）ホテルの一室に男と女が２人っきり！しかも水月はバスローブ１枚だけ、　圭吾の心臓と股間はバクハツしそうになり、浴室から出るに出られずのぼせそうになった。フラフラになりながら浴室を出ると水月はビールを片手にテレビを見ていた。
「上がったぁ？えらいゆっくりはいっとったな～」水月はあっけらかんとしていた。（２人ともバスローブ１枚だけ・・・）圭吾はそう思うと　水月の胸元をチラチラ見ると
圭吾の股間がバクハツしそうになり、水月に気付かれまいとベッドに潜り込んだ。すると水月が冷蔵庫からビールを手渡してくれた。
バシュ　圭吾もビールを開けイッキに飲み干した。「今日は来てくれて、ありがと。」
水月が照れくさそうに言った。水月の生乾きの黒髪がＴＶからの光があたりキラキラひかって見とれる程美しく
圭吾も引き込まれていった。「ホンマ、たまらんで～一方的に約束しやがって、もし俺が来～へんかったら、ど～するつもりやったん

？」

「来てくれたやん！来てくれると思とったし．．．」「また、えらい強気なことで、」

水月は初めて出会った時と同じく、生意気で自信たっぷりの態度は変わらなかったが

時折見せる水月の寂しそうな横顔、照れくさそうに笑う笑顔に圭吾はだんだん引き込まれていった。水月は、神妙な顔つきで

「今日、元彼の命日なんや。真也って言うんやけど、圭吾とよう似とって圭吾を初めて見た時、信也って叫びそうになってもて、ごめんな、なんか引きずりこんでもたみたいで．．．」そう聞くと圭吾は言葉に詰まってしまった。

（俺ってその真也って奴の代わり？んじゃ俺の事気に入ってくれたんちゃうんや～）

圭吾が落ち込んでいるのを見て水月は圭吾の顔を覗き込む様に見た。「けど圭吾ともう1回会いたかった．．．」バスローブから水月の胸の谷間が見え、思わず圭吾は水月から目を逸らした。「けど俺は真也って奴の代わりちゃうし．．．」

「そんなんわかりきっとうやん！初めて圭吾を見た時、そう思ただけやん。話ししよう内に圭吾の事をもっと知りたいって思う様になって．．．

あかんかな？」「いや、そう言ってくれると嬉しいわ。」圭吾はニッコリ笑顔で答えた。

それを聞いた水月にも笑顔が戻りその後、また水月の質問攻めが始まった。最初の内はちゃんと受け答えしていたが、コンパで酒を飲んだのと、メリケンパークまで走ったのと、風呂に入ったのと悪条件が重なってしまい、眠り込んでしまった。「．．．、．．．．．．．．、ちょっと圭吾聞いとん？」「Ｚｚｚ・Ｚｚｚｚ」

「

寝てもとう・・・フフッ　かわいい寝顔、オヤスミ圭吾」

「んんっ～朝か～」ムニュ「んっ！」ムニュムニュ「アン」色っぽい声がした。圭吾は恐る恐る右手の方を見ると水月が同じベッドで寝ていた。圭吾は飛び起き壁に張り付いた。

「おはよ」水月は眠そうな目を擦りながら起きてきた。「おっ　おはよう」圭吾がびっくりした顔をしていると「昨日はめっちゃ激しかったわ！あんなHしたん初めてやわ。」「えっ　え～～～～～っ！うそ～～！」「うそ」「へ！」「せやから　う・そ！びっくりした？」圭吾は胸を撫で下ろした。

「圭吾、はよ隠してくれへん」水月は顔を赤らめながらそう言って圭吾の股間を指さし圭吾は慌ててバスローブを整えた。

「お婿に行けへんって言わんといてよ、もしお婿に行かれへんかったら私が貰たるわ。」水月は笑いながら圭吾に言い、圭吾は苦笑いしていた。　ピンポーン「お洋服のクリーニングが出来上がりました。」

2人とも服に着替え部屋を後にした。ロビーに向かうエレベーターの中で水月は小声で「さっき言った事は嘘ちゃうから・・・」「ん、何？」「なんでもない」　清算を済まし2人はホテルを出た。外は昨日の雨が嘘の様に上がり澄みわたった青空がひろがっていた。駅に向かって二人は歩きだし水月は子供の様に水たまりを飛び越えながら歩いていた。

圭吾は水月の姿を見ながら、　（俺ってお人よしなんか、単なるアホなんかどっちやろ？もしあのまま絢音ちゃんと飲みに行っとったらヤレとったやろな

水月、かわいいんやけどちょっと変やしな～せやけど昨日は寝てなかったらヤレとったやろな～）

そんな事を考えながら歩いていると「・・・・圭吾、ちょっと圭吾聞いとん？」「え！何ごめん他の事考えとったわ。」「もう、どう

せ昨日の事考えとったんちゃうん？このエロ圭吾。もう1回言うで、今日仕事休み？休みやったらどっかデートせーへん？」

圭吾は一瞬躊躇し、「・・・悪い、来週中にプレゼンの資料まとめんとあかんねん。水月を駅まで送ったら会社に行くつもりやねん。」

「そっかぁじゃ、しゃあないな～ほんじゃあここでえ～よ。」水月はニコッと笑い、その笑顔に圭吾はドキッとした。「じゃ、バイバイ。」水月は手を振って歩き出した。

「水月～携帯の番号教えてもろてえ～かな？」水月は満面の笑顔で振り向き「ん～どっしよっかな～？そんなに知りたい？どうしてもって言うんやったら教えてあげてもえ～けど・・・」

「じゃ、ええわ！」圭吾が振り向いて歩き出すとスーツの裾を掴んで「あ～ん。教えるから」

そんな吸ったもんだがあったが2人は携帯番号を交換し圭吾は会社に出社した。

＜月曜日＞「お～い神代、昼メシ行こ～ぜ」川崎と藤森から誘われて、近くの定食屋に行き、案の定コンパの後の事が話題になった。

川崎が身を乗り出す様にすごい剣幕で「お前ら、あの後どないやったんや？藤森！まず、お前からや！」「俺？俺はあのまんま駅まで送ってそのまま帰った。田中さん門限があるみたいで来週の日曜遊びに行こって誘われた。んで駅までの間、手つないで帰ったんや。」

藤森はノリノリでしゃべっていると、「お前は小学生か！」川崎と圭吾からダブルでツッこまれ「手握る位やったら、チューせんかいや！」「そのままホテル連れ込んでヤってまえよ」とかやっかみ半分にヤジられた。「そうゆう川崎どないやねん？久美子ちゃんとヤったん？それとも犯されたん？」

「するか～！」川崎は強く否定し

「あのデブ最悪や～あの後ショット・バーに連れて行かれて（ア～ンもう飲めへん、どっかでゆっくり休みた～い）ってぬかしよんねん。マジでコイツ殺したろかいなって思たわ、ホンマ！」

食事中にもかかわらず圭吾達のテーブルは大爆笑だった、「せやからトイレ行く振りして金だけ払て帰ったった！」川崎にとっては久美子との時間は、かなり苦痛だったらしく息巻いてコンパの後の出来事を語った。

藤森がニヤニヤしながら「神代、お前ヤったんやろ！田中さんから聞いたけど、絢音ちゃんあの後ホテル行く気満々やったらしいで！」

「え～マジかいや！急用思い出して、すぐ帰ったわ、失敗した～。」圭吾はかなり悔しそうにご飯をかきこんだ。

（くそ～この穴埋めはプレゼンが終わったら絶対晴らしたる。）昼食後3人は会社に帰り来週のプレゼンの為、連日深夜まで資料の作成に仕事に没頭していた。

＜金曜の夕方＞

「山波部長、今回のプレゼンの資料です。・・・・・・どうでしょうか？」3人は部長の審判をまっていた。山波部長は険しい顔つきで資料に目を通していたが、「よし、いいだろう。他メーカーに負けない様、がんばってこい。」3人の顔には笑みがこぼれ、仕事をやり抜いた男の顔つきになっていた。「やったぜ！部長のお墨付きが出たら、今回のプレゼンもろたな。」川崎が先走って浮き足立っていると、「まだ受注も貰てないから、なんとも言われんけど絶対成功さしたる！」圭吾が今回のプレゼンに対する決意を述べた。

「前祝いを兼ねて3人で飲み行かへん？」川崎が飲みに誘ったが藤森はまだ仕事

が残っているので参加出来なかった。7時頃、仕事がかたずいた川崎と圭吾は会社の玄関から出ようとしていた。
「神代、いつもん所でえ～か？」川崎がふと前を見ると絢音が手を振って小走りに走って来た。
「やっぱり神代、お前帰れ」
「へ！」川崎も絢音の方へ駆け出し「マイ・ハニー」と言って抱きしめた横を絢音が走り抜けた。
よく見ると川崎が抱きしめたのは久美子だった。
「ん～尚之ったら、いくら私の事好きでもみんなの前やったら恥ずかしいやんか」川崎は又、半泣き状態で久美子に引きずられて神戸の街に消えていった。
絢音は圭吾の下へ行き「この間、今度埋め合わせするって言うとったから、ご飯連れて行ってくれるんやろ？」「えっ・・・あぁえ～で、ほんじゃあ行こか。」圭吾は川崎の事が気になりつつも絢音と食事に行く事になった。圭吾は川崎の事が気になりつつも絢音と食事に行く事になった。
圭吾は小じゃれた居酒屋に絢音をエスコートし一息ついた時絢音が「プレゼンの準備、ご苦労様。田中さんから今週いっぱい神代さん達忙しいって聞いとったから」「なんで田中さんが知っとん？」圭吾は不思議に思ったが、すぐに謎が解けた。「あ！もしかして田中さん、藤森と付き合っとん？」「え？知らんかったん。藤森さんから告ったらしいで。」圭吾達は藤森に騙されていた。
そんなこんなで会話が弾み、時間が過ぎていった。「絢音ちゃん、別に敬語使わんでえ～で初対面ちゃうし敬語使われんのもなんかこそばいし・・・」
「そう？んじゃ圭君って呼んでえ～？」絢音は可愛らしく圭吾に聞いた。その仕草に圭吾はドキッとし、照れながら「うん。別にかまへんよ。」
「やった～！
圭君飲も飲も。」絢音は圭吾にビールをドンドン注ぎ、絢音もお酒が進んだ。

１１時も過ぎた頃圭吾と絢音は店を後にした。絢音はかなり酔っていて足元がおぼつか無かったが圭吾は酔っ払った絢音を支えながら駅に向かって歩き出した。「絢音ちゃん大丈夫？」「らいりょうぶ・らいりょうぶ」ロレツも回らないぐらい絢音は酔っていて、圭吾は今夜ホテルに行く気マンマンだったが絢音がこんな調子の為諦めざるを得無かった。

駅に向かう途中絢音が「圭君、私の事好き？私は圭君の事大好き。」絢音は潤んだ瞳で圭吾を見つめ瞼を閉じた。

圭吾は絢音にキスしようと顔近づけた時、「うっ！！」圭吾がかわす暇無く絢音は嘔吐し、断末魔に近い圭吾の悲鳴が神戸の街に響き渡った。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｅｄ

突然！（前書き）

絢音が圭吾の部屋で朝を向かえ、駅に送った後、突然水月がたずねてきた。

突然！

「うぅ～ん　もう朝？」寝ぼけた顔で絢音がムクッとベッドから起きてきた。絢音は辺りを見渡し

（う～ん、ここ何処～？

たしか昨日、圭君と飲みに行って・・・）

絢音はハッと気付いた様にもう一度辺りを見渡した。（あっ、ここ圭君の家や。ふ～ん　結構キレイにしとうやん。）

絢音がふと、鏡に目をやると黒のTシャツ姿の自分が目に入り、今自分がTシャツ以外、何もつけていない事に気が付いた。「えっ私、下、裸？なんで？」ガチャ「お！起きた？おはよう。」「おはよぅ、」絢音は恥ずかしそうに答えた。「昨日、大変やったんやで、居酒屋で酔っ払うし駅に行く途中にゲロ掛けられるは、あんな格好で電車乗られへんから、タクシーに乗ろう思ても乗車拒否されるから、三ノ宮からおんぶして帰って来たんやで。」　「えぇ！ウソ！圭君ごめん」申し訳なさそうに謝った。「別に気にしてへんよ。」圭吾は笑いながら言った。絢音はモジモジしながら

「圭君、ちょっと聞いてえ～？私の服は？」「ん、ゲロまみれやったからクリーニングに出したで」「下着は？圭君が脱がしたん」「うん、ゲロ汁でめっちゃ臭かったし、コイン・ランドリーに出して来た」「ほんじゃあ、全部見た？」絢音はシーツで顔を半分隠しながら聞いてみた。

圭吾も顔を真っ赤にしながら「うん、でもなんもしてないで！」「何もしてないん？」絢音はちょっと残念そうに言った。

「酔って寝込んどう女の子を襲うのは、フェアーちゃうし、それにゲロ臭いのにHしようと思わへんわ。」それを聞いて絢音は圭吾の事を惚れ直した。　だが、すぐにニヤニヤしながら「ふ～ん、でも私の裸をオカズにした？」「アホか！・・・・でもごっついキレイやったわ」恥ずかしそうに言い

ながらタバコに火を付けた。しばらくの間、お互いだまっていたが、沈黙を破ったのは絢音の方だった。グゥゥ～「なぁ　お腹減った」圭吾は絢音の腹の虫が聞こえたらしく、クスッと笑い「んじゃ、俺なんか作るわ」そう言うと圭吾はキッチンに向かい料理を作り出した。絢音がテレビを見ていると「おまたせ！」そう言って料理を運んで来た。ご飯・味噌汁・出し巻き卵・キンピラゴボウというメニューだった。「へ～すごいな～、男の人がご飯作れるってなんか、カッコえ～な。」「一人暮らし、けっこう長いからだいたいのモンやったら作れるで。」そう言って箸を取りおもむろにご飯を食べ始めた。

絢音も食事に手を付け一口食べ「おっいし～い！」「そう。」圭吾はテレながら答えた。食事も終わり部屋でウダウダしゃべっていたが、絢音の携帯が鳴った。掛かって来たのは家からだった。

「ヤバッ家からや。無断外泊したからお父さんやったらシバかれるわ」絢音は焦りながら携帯を取った。相手は母からだった「絢音、今どこにおるん？お父さんカンカンやで！すぐ帰って来なさい」そう言って電話を切った。「あっ！ちょっとお母さん．．．」絢音は青ざめた顔で「ヤバッお父さんに怒られるわ、どないしょ～」「俺、行って事情話したろか？」「ダメ！そんな事したら殺されてまうわ、ごめん服取ってきてくれる？」

圭吾は慌ててクリーニング屋とコイン・ランドリーに走った。絢音は急いで着替え、駅に向かった。「圭君ごめんね、迷惑かけてもて．．．」「いや俺は大丈夫やけど絢音ちゃんこそ大丈夫？」絢音は泣きそうな顔で「又、メールするね」と申し訳無さそうに言った。

駅に着き絢音を見送るとコンビニにタバコを買いに入った。コンビニを出た途端、携帯が鳴った。相手は水月だった。

「もしもし圭吾？今どこにおるん？」

「今？駅前のコンビニ・・・あーーーっ！！」トラックが通り過ぎた反対車線に水月が立っていた。　　水月も気が付いたらしく、手を振りながら走って圭吾のそばにやって来た。「え？なんで？」圭吾が驚いた顔をしていると「なんでって、今週いっぱい仕事が忙しいって言うとったやん。んで今日やったら仕事も落ちついとうかな～？って思て・・・迷惑やった？」水月は捨てられた子犬が拾ってほしそうに哀願する様な目で圭吾を見つめた。圭吾は水月のその眼差しに思わず目を逸らしてしまい、それに気付いた水月は少し怒った口調で　　「なに目～逸らしとん？」と言って圭吾の顔を覗き込んだ。（うぅ～かわいーー、こいつこのままチューしかろか！）などと思いながらモンモンとしていると、「あ～っわかった！どうせヤラシイ事考えとったんやろ。H！」図星だった為、圭吾は焦ってしまい言い訳もしどろもどろになってしまった。　　圭吾はなんとか話しを変えようと歩き出した。話題を変えようと「今日はどないしたん？」「ん？今日は圭吾にご飯作ったろかな～って・・・」「はぁ？水月メシ作れんの？」「どうゆう意味！」ちょっと怒りぎみに答えた。「ごめん、ごめん水月がメシ作れるの意外やったから」圭吾はハッと気が付いた、（ヤベッ絢音ちゃんとメシ食った後かたずけしとらへんわ！このまま家に連れて行ったらマズイ！）「圭吾の家ってここから近いん？」　　水月は圭吾の家に行く気マンマンだった。「いや、家は今、ちらかっとうからちょっとマズイ・・・・」圭吾は必死に家に来るのを食い止めようしたが

「掃除ぐらいやったるやん」圭吾の困った顔を見てピーンときた。

「ふ～ん家に来られるとまずいんや～どうせＡＶとかその辺にほったらかしにしとんやろ！」（ナイス・アシスト！）と圭吾は思い話しを合わせた。　　「なんでバレたん？」「わかるわ～男の人が女を部屋に入れた～無い時はＡＶがそのままになっとう時か部屋に女がお

る時やもん！」　　（こいつ、するどい！）圭吾は焦りながらなんとか家に行くまいと他の話題に切り替え様とした。

「あ！水月、どっか遊びに行こか？デート代は俺持ちで・・・」

「え～！せっかくご飯作ったろうと思とったのに」

最初はイヤがっていたが、しぶしぶO．Kし2人は電車に乗り、モザイクに向かった。2人はウインドウ・ショッピングを楽しみ、特に何をするでも無くブラブラし、海の見えるテラスでジェラートを食べながら、ふと先を見ると海を挟んでメリケン・パークが見え水月は、2人が出会った日の事を話し出した。「ねぇ圭吾、初めて会った日の事覚えとう？」「ん？覚えとうで。俺、水月の第一印象最悪やったもん」水月はふくれっ面で

「そんなに私、第一印象悪かったん？」

「うそ～！でもちょっと変わった娘やな～って思て、もう二度と会う事は無いと思とったんやけど・・・又会ってもた。」「それって恋の始まり？」

水月は意味深な笑みを浮かべて圭吾を見つめた。圭吾は、ふぅ～っと大きな溜息をつき（やっぱ、自己中な奴！）と思いながらジェラートを食べていると水月は小声で「・・・・・・・・・・・私はあの後、もう一回圭吾に逢いたかった・・・・・」うつむきながら囁いた。だが圭吾には聞こえて無かった様で「・・・・・・・ん？どないしたん？寒なったん？」「ううん、何でも無い大丈夫」水月は笑顔で答えた。そして2人はお互いの事を話し合った。水月が小さい頃、事故で父親を亡くし母子家庭で育った事・お互いの仕事や友人の事・圭吾の女性遍歴など話したが、お互い重大な秘密を打ち明けられずにいた。辺りは薄暗くなり、イルミネーションの明かりがモザイクを幻想的に照らし始めた頃、

「腹減ったな～晩飯喰いに

行こか？ＪＲの灘駅の近くに俺の行き着けの居酒屋があるんやけど、そこでえ～？」水月は圭吾の部屋に行きたがったが、なんとか言いくるめ水月は渋々ながら納得し、２人は居酒屋に向かった。「へい、らっしゃいー」威勢のいい挨拶が飛んできた。「大将、まいど！」「おぉ、圭ちゃん！こっちこっち！」圭吾はカウンターに招かれ椅子に座ろうとすると、水月が入って来て圭吾の横に座った。「え！もしかして・・・・・圭ちゃんの彼女？お～い、みんな～圭ちゃんが彼女連れてきたぞ～！」

「マスターそんな彼女やなんて、ねぇ圭吾。」水月の顔はニヤけてグニャグニャになっていた。

「別に彼女ちゃうし、一方的に付きまとわれとうだっ・・・イチチチ」「彼女やろ！？」水月は引きつった笑顔で圭吾の耳をひっぱりながら半強制的に彼女と言う事にされてしまった。圭吾が彼女を連れて来る事は、かなり珍しいらしく大将は根掘り葉掘り聞いてきた。「２人はいつから付き合っているんだ」「え～とね。２週間前からかな」水月は一方的に話を進めた。「どっちから声かけたん？」「圭吾からで～、奴隷でもえ～からそばに居らしてって泣きついてきたから、しょうがなく一緒に居るんや」「圭ちゃん、そんな事言うん？」圭吾は呆れ顔で「言わへん・言わへん」手を顔の前で左右に振り２人の仲を否定した。食事も進み圭吾がトイレに立つと、水月がすかさず大将に圭吾の過去について聞き始めた。

「ねぇマスター、圭吾ってここに彼女連れて来た事あるん？」「２・３年前に１回だけやけど連れて来た事があるで～水月ちゃん、気になる？」「うん」「俺もその時しか会ってないから、あんま覚えてないけど、物静かな娘やったな～・・・・・・水月ちゃん、圭ちゃんの事、大事にしたってな～あいつ、ああ見えてもけっこう寂しがりややから・・・」大将はタバコを吹かしながら水月に話した。「大丈夫、私は圭吾とラブラブやから」水月は自信満々で大将に言い返した。そうこ

うしている内に圭吾が戻ってきた。水月が圭吾の顔をジィーっと見ていると「何？俺の顔になんか、ついとう？」「ううん、圭吾って男前やな～って思とったトコ」「はあ～？いきなり何言うとん、おだててもなんも出～へんで」「え～！出～へんの」水月は笑いながら答えた。その光景を見ていた大将は「お前ら、イチャつくんやったら、ラブホでも行ってやれ！」とおちょくりながら2人に言った。それから、しばらくして2人は店を跡にした。　「水月、家何どこ？近くまで送るわ」水月は、圭吾の目をジィーと見て

「今日は帰らへん。圭吾ともっと一緒に居りたい。圭吾の事もっと知りたい。私の事、圭吾にもっと知ってもらいたい。」そう言うと圭吾の胸に寄り掛かった。圭吾は寄り掛かった水月を優しく抱きしめた。ポツリ、ポツリと雨が降り出してきた。2人の体温の温もりを確かめるように・・・・・・・・・

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｎｉｕｄ

永遠（前書き）

絢音との関係もはっきりしないまま水月と体の関係を持ってしまった圭吾、自分の気持ちが迷っているが・・・・

永遠

雨が降りしきる中、2人はホテルの一室にいた。お互いを求め合う様に激しく抱き合った。そしてお互い果てた後、圭吾はベッドでうつむせでタバコに火をつけた。「圭吾、私の事好きになってくれる？私は圭吾の事好きになってもたから．．．．．」「え！俺．．．．．．」圭吾はしばらく黙り込んでいたが堰を切った様に話し出した。「一つ聞いてえ～？真也って人、亡くなったって言うとったけど、なんで亡くなったん？話したく無いんやったら無理には聞かへんけど．．．．．．」「真也が死んだんは2年ぐらい前で裏六甲に走りに行っとって．．．．」「そこで事故ったん？」「ううん、その帰り道に飲酒運転の車にひき逃げされて．．．．．」　水月の目にはうっすら涙が浮かんだ。「ごめん、嫌な事思い出さしてもて．．．」水月は涙を拭いながら

「別に圭吾が悪い訳ちゃうやん、真也が死んだ時もう誰も好きにならへんと思たけど．．．．．．．．．．．．．．．．．けど圭吾と初めて出会った時、私もう1回この人と恋愛するって．．．ううん圭吾と恋愛したいって思た。」圭吾は水月のまっすぐな眼差しにドキッとし、思わずタバコを落としそうになった。「えっ！でも俺、水月の気持ちは嬉しいけど．．．．．．けど水月の気持ちに答えられるか、どうかわからへんし．．．．．」水月は一瞬顔を曇らせた。

「でも今、俺水月が好きや。この先の事は、わからへんけど．．．」次の瞬間、水月の顔が明るく笑って「ホンマ？信じてえ～ん？」　「うん俺、真也って奴より水月の笑った顔を隣で見ときたい」水月は圭吾に抱きつき

「圭吾、好き・好き・好き・大好き！私をこんだけ好きにさした

んやから浮気したら、殺すで・・・・」ゴクッ圭吾はノドを鳴らした。「ははははっ冗談よ、冗談！」　　圭吾は絢音の事が頭によぎった。（絢音ちゃんの事は、勿体無いけど諦めよ。）「俺、水月の事裏切らへん！」そう言って水月を抱きしめた。

「ん？なぁ圭吾、足になんか、当たっとんやけど・・・・」

「あ、いや復活・・・・もう1回」2人は又求め合った。

翌朝、2人はホテルを後にした。「水月、今からどうする？」「今日は帰るわ、無断外泊やから、おかんも心配しとうやろうし・・・・又電話するわ」そう言うと水月は別れを惜しむ様に帰って行った。圭吾は家に向かう途中（人を好きになんの2年振りか・・・・絢音ちゃんには彼女が出来たって言わなあかんな・・・・・1回ヤッとったらよかったかな～失敗した～！）喜びと後悔を繰り返しながら家路に着いた。

＜月曜日＞圭吾・川崎・藤森の3人は朝一の新幹線で東京に向かった。「なぁ神代、今日のプレゼンのアシスト頼むで！」「O・K任しとけ、俺と藤森2人がアシストしたるから、絶対受注取って帰るで～」三人は決意を新たに商談先の会社に乗り込んだ。

圭吾達の会社以外に十数社プレゼンに参加しており、会場の熱気に3人は圧倒されつつも圭吾達の順番が回って来た。3人は自分達の実力を十二分に発揮し結果が出るまで、控え室で待つ事になり、自分達の仕事が終わり3人は安堵の表情を浮かべ、しばらくすると必然的に女の話になった。

「藤森お前、田中さんと付き合っとうみたいやな？絢音ちゃんから聞いたで」藤森は照れながら頭を掻いた。「へへっ。バレた？紀子メチャクチャ、　　カワイイでホンマ！昨日初デートやったんやけど、俺、メロメロやわ～」「ケッ！もう呼び捨てかいや！」川崎が憮然と吐き捨てた。「神代もえ～よな、絢音ちゃんみたいにカワイ～て、チチでかい娘とヤりまくりやし・・・・・」

「ヤッとらへんわ！」川崎・藤森の2人は驚いた顔をして「なんで

～？神代お前ホモ？それともインポ？」「いや、なんとなく・・・・・」圭吾は川崎達に水月の事を話すべきかどうか迷ったが、結局話さなかった。「川崎、お前はどないやねん？」そう圭吾が言うと川崎は泣きそうな顔をして「藤森～ホンマあの女どないかしてくれ！」圭吾と藤森は川崎と久美子のなりゆきに興味津々だった。「川崎、あの後襲われたんか？」圭吾が聞くと川崎の頭の上に暗雲が立ち込めた。

そしてポツリポツリと話し始めた。「神代と別れた後、飲みに連れて行かれて飲まされてベロベロになってもて朝起きたら、あいつが裸で横で寝とった。」「って言う事はヤッてもたって事？」「やと思う・・・・・」川崎はかなりブルーが入っており2人はそれ以上聞くのをやめた。

しばらくして商談先の担当者が控え室に入って来た。「本日はお忙しい中、有難う御座います。でわ名前を呼ばれました会社のみなさんは退出して頂く様お願い致します。○○商事・・・・・・・・・・・・・」どんどん他メーカーが部屋を後にした。そして圭吾達の会社ともう1社の2社に絞られた。そして担当者が口を開いた。「松岡コーポレーションのみなさん、今後とも、宜しくお願いします。」3人は一瞬あっけに取られたが、すぐに気を取り直して「ありがとうございます。」3人は深々と頭を下げた。3人は先方との契約も無事終了し、会社に連絡し受注が取れた事を山波部長に報告した。「そうか、よくやった。おめでとう！だがこれからもっと忙しくなるぞ。じゃ気を付けて帰って来い」山波部長から労いの言葉が電話口から聞こえてきた。そして3人は神戸に帰って行った。神戸に着いた時には9時を回っていた。「川崎、祝賀会やろうぜ、神代お前どうすんの？」「いや、俺は遠慮しとく・・・・」「そうか～ほな川崎行こ～ぜ」2人と別れた後、圭吾は会社に向かった。圭吾がパソコンに向かって今日のプレゼンの資料の整理をしていると、絢音から電話があった。「もしもし、圭君？今日のプレゼン成功

したんやて！おめでとう！」「ありがとう」「今度、お祝いしなあかんな～」「そんなん別にえ～で」そんなやり取りがしばらく続いた。
圭吾はふと、水月の事を思い出した。そして絢音に水月の事を話そうと思い「絢音ちゃん、ちょっと話しがあんねんけど、明日会えるかな。」「うん、え～で仕事終わったらメールちょうだい」「わかった」電話を切ってすぐに水月から電話が入った。
「圭吾、今日の商談どないやった？」「うん、商談がまとまって受注、貰えた」「やった～おめでとう！！」水月は電話口で自分の事の様に喜んでくれた。
「じゃ、お祝いしたるわ明日の予定どう？」「ごめん、明日はちょっと・・・・・・」「あっそうやな、仕事が忙しいっか。んじゃ金曜やったら大丈夫？」「金曜やったら大丈夫やと思う。」「じゃ金曜日ね、今何処？会社？」「うん、ちょっとやっときたい仕事が有ったから」「ホンマ～？お疲れ様。じゃ仕事頑張ってな～おやすみ」「うん、おやすみ」圭吾は水月に嘘をついてしまった。（水月ごめん、絢音ちゃんとは明日で最後にするから・・・）
そう懺悔しながら圭吾は再びパソコンに向かった。

＜翌日＞圭吾は仕事を早めに仕事を切り上げ、絢音との待ち合わせ場所に急いだ。待ち合わせ場所には、すでに絢音が待っていた。
「ハァハァごめん、遅～なってもて」
「ううん仕事なんやからしゃ～ないやん。ご飯食べに行こ！圭君、美味しいイタメシ屋さんがあるんやけど、そこでえ～？」
圭吾は絢音に連れられてイタメシ屋に行き一通りオーダーも終わり、ビールがテーブルに運ばれた。
「圭君、お仕事お疲れ様。じゃ商談が成功しておめでとう！乾杯～！」しば

らくすると、食事が運ばれ、２人は料理を食べ始めた。
「紀子先輩が言うとったけど藤森さんが今回のプレゼンが成功したんは神代のお陰やって言うとったで～」「いや、俺はただ、川崎のアシストしただけで川崎がおらんかったら、今回のプレゼンも成功しとったかどうか、わからへんし・・・・」圭吾は謙遜したが、内心は藤森が圭吾の事を認めてくれていた事が、嬉しかった。絢音はテレながら謙遜する圭吾を見て、ニコッと微笑み
「あっ圭君知っとう？藤森さんと紀子先輩、かなりえ～感じみたいやで」　「みたいやな。昨日、藤森がデレデレで喋っとったわ、それより・・・・・」圭吾は川崎と久美子の事を切り出した。
「川崎と久美子ちゃんの事なんやけど・・・・・川崎もちょっと困っとうみたいやから、絢音ちゃんから其れと無しに言うてくれへん？」絢音は食べながら淡々と語った
「無理ちゃう！あの子イノシシみたいな子やから、川崎さんには気の毒やけど襲われるまで、逃げられへんと思うわ。悪い娘、ちゃうんやけど・・・・・・」　（それってタチの悪いストーカーやんけ・・・・）などと思いながら箸を進めた。食事も終わりデザートが運ばれて来た頃、絢音が「圭君、なんか話しがあるって言うとったけど、話しって何？」「あぁ大した事ちゃうから後で話すわ」圭吾は言葉を濁した。食事も終わり店を後にした２人は北野坂を歩いていた。絢音は圭吾より少し前を歩き、ライト・アップされた街並みを見ていた。圭吾は水月の事を言い出すタイミングを計っていた。「もうすぐ、ルミナリエやな～。圭君！一緒に行こな～」と言って笑顔で振り向いた。その振り向いた笑顔を見た圭吾は、ドキッっとし、「うん、行こか～」思わず答えてしまい、
「ところで話しって何？」圭吾は返答に困り、「う～ん、なんやったかな～ド忘れしたわ、又思い出したら話すわ」トボケながらその場を凌いだ。　２人は、そのまま三ノ宮駅に向かって歩きながら他愛も無い会話をし、圭吾は絢音が電車に乗るのを見送って圭吾も阪急の駅に向かった。　（はぁ～～何で

俺あんな事言うてもたんやろ・・・・・水月の事、大事にするって言うたのに・・・・でも絢音ちゃんもカワイイしな～どっちもえ～女やしな～今度会ったら絶対、水月の事話して会わんとこ、でもHはしたいな～めっちゃ巨乳やし、あの乳揉んでからでも遅～ないか。）などと思いながら家路に着いた。　　＜金曜日＞（おっそいな～圭吾の奴！もう帰ったろか・・・・・・）Ｐｐｐｐｐ水月の携帯が鳴り、圭吾からだった。

「ゴメン、今日仕事終わりそうに無いわ。今度埋め合わせするから」一方的に電話を切られた。「何あいつ！仕事やったら、しゃ～ないけどもっと言い方があるやろ！」水月が怒って携帯を見ていると、後ろから「ねえ、お姉さん。ご飯でも食べに行かへん？」と声を掛けられた。

水月はややキレぎみの口調で「私、そんなにヒマちゃうし・・・・」振り返ると、そこには圭吾が立っていた。「そうヒマちゃうんか～じゃ俺帰るわ」　　水月は凄い形相で「圭吾、あんた手の込んだコントしてくれるやん！今日ただで帰れると思わんといてよ。有り金全部と圭吾の体で返して貰うでぇ～」「え～マジで～今日水月のオゴリやったんちゃうん？」「うるさ～い！嘘ついた罰や！」そう言うと水月はさっさと歩いて行った。

「水月、待ってよ～ゴメン・ゴメンそんなに怒るって思わへんかったし、びっくりした？」と圭吾が言い終わると水月は急に振り帰りキスをした。　　「ふふっ別に怒ってないで、怒ったフリしただけやん。でも仕事で来られへん時は前もって連絡してよ、約束！」そう言って小指を出し2人は指切りをして食事に行った。食事を始めると水月が「んじゃ、これから仕事忙し～なるんとちゃうん？」「う～ん、たぶんそうなると思う。年内は注文と発注の繰り返しでバタバタするやろな～」水月は残念そうな顔をしながら「え～ほんじゃルミナリエ一緒に行かれへんのかな～」「いや、行く絶対一緒に行く！時間はなんとか作るから一緒に行こ！」圭吾

は本心から語った。水月は嬉しそうに笑った。２人は楽しい食事の時間を過ごし、水月は圭吾の部屋で一夜を明かした。明け方、目を覚ました水月は圭吾の寝顔を見てこの幸せな時が永遠に続いて欲しいと願った。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5157d/

雨唄の奏でるｓｔｏｒｙ

2011年1月28日16時18分発行